

所属校	東京都立山崎高等学校	氏名	松木 富美代
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	保健体育・保健体育
研究テーマ	性に関するリスク認知と意志決定を中心とした教育プログラムの検討		

1 研究の目的

(1) 目的 本研究の目的は、教科・保健の中で恋愛を始めとする全ての性行動にはリスクがあり、それを認知した上で意志決定をすることが重要であるということ、高校生自身に考えさせるためのプログラムの作成とその有効性を検討することである。

(2) 現状と課題

女子における性行動の早期化現象が顕著だと言われているものの、年齢が低くなるほどにその経験は本人に肯定的に受け止められていない。また男女ともに初交のみで終わるケースも多く必ずしも継続的な行動になっていない。これらのことは、高校生の性行動が十分な検討の上で意志決定されたものではない可能性を示唆している。さらに女子の性行動の早期化、活発化が注目されているものの、リスク回避行動を男子に依存する傾向に変化はなく、性行動におけるイニシアティブをとっている男子においてもリスク回避行動が取得されていない。性教育においては、生理学的な内容を中心としたものか、特定のリスク回避行動に焦点をあてたものに二局化する傾向にあり、情報化時代の只中にありながらも「愛とはなにか」「異性との交際のあり方は」はなどという旧来からの課題に悩む高校生を支援していない。さらに性教育についてはその重要性が以前より指摘されているものの、教員のとらえ方の違いや諸課題への危機意識の不足から教育活動全体を通して意図的・計画的に整備されていない現状がある。高等学校においては教科・保健での性教育の実施が42%と他の校種と比較すると高率であるものの、その内容はこれまで生理的なものが中心で現代の若者が直面する課題への対応という意味においては不十分であるとの指摘を受けてきた。

(3) 研究の位置づけ

平成15年から実施の学習指導要領においては各教科の保健部分で「異性を尊重する態度や、性に関する情報等への対処、適切な意志決定や行動選択の必要性についても扱うよう配慮するものとする。」と示され、高校生が直面する課題を取り扱うことが可能となった。教科・保健で性教育を行うことの意義は、教育を受ける対象者の確保、系統的な教育内容の構築とその計画的な実施のための時間が保障されているという点にある。そこでこれらの問題に対応するべく教育プログラムの編成を行った。

2 研究内容

性行動に関するリターンとリスク、情報収集と意志決定の関係、人間関係における重要な事項、恋愛進行基準と恋愛のリスク、リスク回避行動の阻害要因、リスク回避行動、性行動に関する知識、十分な思考を前提とした意志決定の方法、以上8項目を中心とした教育プログラムを編成した。人間関係や恋愛について考えさせるために、心理学的要素を取り入れた。性行動の具体的な選択の場面は、ロールプレイでよく用いられる「誘われて 断る方法」ではなく「誘って相手の返事を受けてその後どのような意志決定をするか」の設定とした。異性との関係を中心とした内容であるものの、同性愛や両性愛にも適応するものであることを前提にした。1回の授業は50分構成とし、各時間とも教科・保健担任と筆者とのチームティーチングで行った。

2003年9月から2003年1月にかけて、全日制普通科A高校の2学年4学級161人を対象として、教育プログラムの施行と調査を実施した。6時間プログラムを施行する群をA群、4時間プログラムを施行する群をB群、プログラムを施行しない群をC群とした。

A群は、直前調査→6時間プログラム→直後調査→追跡調査の順で、B群は、直前調査→4時間プログラム→直後調査→追跡調査の順で、C群は第直前調査→直後調査→追跡調査の順で行った。調査は3群とも同時期にA群、B群に対するプログラムは同一週に実施した。C群に対しては研究終了後にプログラムを実施し教育を保証した。全ての調査が終了した段階でカテゴリーごとに主成分分析を施し、第一成分にて.5以上の項目を抽出し、信頼性分析を行い α 係数.8以上のものを採用し、友人との関係尺度、性行動における意志決定尺度、リスク回避行動に関する意識尺度と名づけ、それに知識理解を加えた4尺度で3群間の差を検定することとした。

3 研究成果と課題

事前調査段階で4尺度全てにおいて有意差がないことを確認した後に、3群間におけるプログラムの有効性を2元配置の分散分析にて検討した。性行動における意志決定尺度においては、交互作用はみられなかったが、主効果が認められた。女子においては交互作用($p < .01$)がみられた。リスク回避行動に関する意識尺度においては、交互作用が認められた(図1)。男女別に検定したところ男子においては、交互作用は認められなかったが、主効果($p < .05$)がみられ、女子においては交互作用($p < .01$)がみられた。知識理解尺度においては、交互作用($p < .000$)が認められた(図2)。

A群、B群の両群において性行動に関する意志決定、リスク回避行動に関する意識、性感染症に関する知識理解とも直後調査、追跡調査において高得点が維持された。以上のことから本教育プログラムを実施することにより教育効果が得られたことが明白となった。特にA群女子においては、性行動に関する意志決定、リスク回避行動に関する意識において追跡調査段階でも得点の向上が確認された。これらはA群のみに施行した授業がA群、B群両群に施行した内容と比較してより踏み込んで具体的に考えさせたことに由来するのではないかと考える。しかし3尺度においてA群、B群間に有意差が見られなかったことは、教科・保健の中で最低4時間を性教育に配当すれば教育効果が得られることを示唆しているのではなかと考える。

図1 リスク回避行動に関する意識

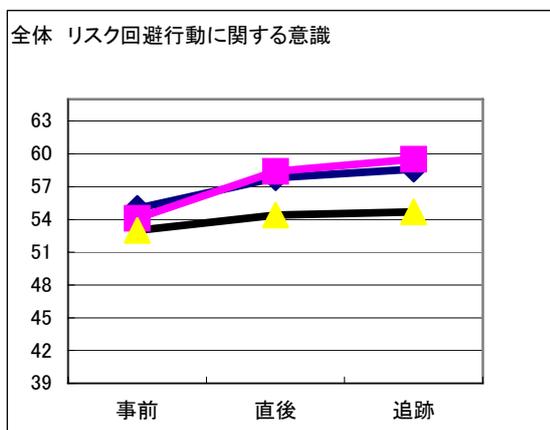
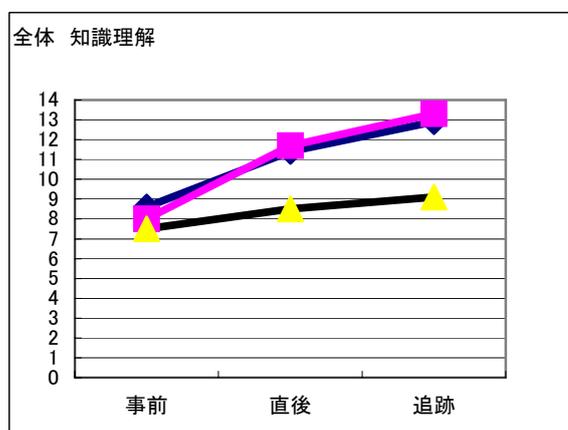


図2 知識理解



所属校	東京都立山崎高等学校	氏名	松木 富美代
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	保健体育・保健体育
研究テーマ	性に関するリスク認知と意志決定中心とした教育プログラムの検討		

1 大学院派遣終了後に勤務校を異動となったため、研究時と同様の形態での教育プログラムの実施には至っていない。しかし保健室を訪れる生徒に対して、個別指導という形態で教育プログラムの一部を施行している。

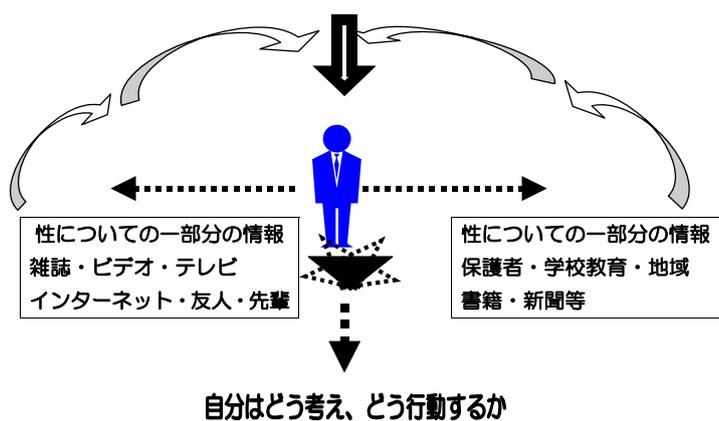
所属校で 全国的規模で実施された統計では、高校生が異性との交際のあり方や、愛とはなにかなどについて悩んでいるということが示されている。そこで保健室では、性行動という相手のある行動においては、自分のもとより、相手を尊重した行動選択が重要であることを理解させることに重点をおいた指導を展開することで上記の事に悩む高校生を支援している。

具体的には、性行動の選択や関連するリスクについて、図1及び、人間関係に関するワークシートを用いている。心理学的統計に基づいて作成された恋愛進行の段階表とあわせ提示し指導をすることで、生徒は慎重な行動選択の重要性について理解することができたようである。リスク回避行動を阻害させている要因についても触れる個別の保健指導が「こころの健康づくりのための教育」へと繋がっていくケースもある。

高校期だけではなく生涯にわたる健康のために、性に関するあらゆるリスクを認知させ、生徒自身に慎重な行動選択のあり方について考えさせる保健指導を今後も継続していきたいと考えている。

図1は情報の活用の仕方について説明する際に用いる。

図1 **情報を元に自分の行動を決めるとき**の注意
自分の考えに近い情報、自分の考えとは異なる情報のどちらも情報としてとりいれる



<p>2 学 会 で の 成 果 活 用</p>	<p>平成16年度学校保健学会にてキーワードを「性行動」「意志決定」「リスク認知」とし演題「性に関するリスク認知と意志決定を中心とした教育プログラムの検討」を発表した。</p> <p>発表後に参加者からプログラムの具体的な内容についての問い合わせがあり、授業の具体的展開方法などの情報を提供した。</p> <p>平成17年度学校保健学会にてキーワード「性教育」「意志決定」「保健学習」とし演題「性に関するリスク認知と意志決定を中心とした教育プログラムの検討 報告Ⅱ」を発表した。</p> <p>発表に際し、教育プログラムの構成、授業用スライド、ワークシートなどを提供し参加者がそれらを利用し授業を再現できるようにした。</p>
<p>3 今 後 の 活 用 計 画</p>	<p>(1) 校内における活用</p> <p>本研究プログラムは、保健学習において展開することを念頭に開発したものである。しかし現段階では、保健室での個別指導においてプログラムの一部を活用するのみとなっている。そこで今後は、4時間計画の教育プログラムを教科教諭とのチームティーチングなどの方法で、保健学習として展開できるように調整し平成18年度の実施を目指している。</p> <p>(2) 校外における活用</p> <p>教育プログラムの展開に必要である「指導案、授業進行のためのシナリオ、ワークシート、スライド、冊子」をセットにし電子媒体を利用することで学校外にも広く成果を還元していく予定である。</p> <p>また養護教諭が行う系統的な保健指導としての活用が可能となるように、その構成を再編成し、研修会等で成果を還元していく予定である。</p>